
丁半草履

yoichi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

丁半草履

【Zコード】

Z4571F

【作者名】

yoichi

【あらすじ】

小さな宿場町を訪れた旅人は、荷物持ちの子供と博打をすることとなつた。あつけなく決した勝負には実は裏があり……。一風変つた博打を扱つた時代物です。

宿場に続く険しい峠道を、一人の男が下ってきた。一見して旅の者だとしれるその男は、宿場の入り口に立つ子供に旦那を留めた。子供の方も旅の男に気づいているようで、旦那が合ひ口をすぐに近寄ってきた。

「旦那。長旅だつたみたいだね。荷物持つてあげるよ

「おう、すまないね。えらいな小僧。旅の荷物持ちで小遣い稼ぎか？ 近くの旅籠まで運んどくれ

旅籠までの道を、旅の男と子供は並んで歩いた。

「旦那、どこまで旅してるんだい？」

「江戸から帰るところだ。少しばかり歩き疲れたから旅は終わりだよ

「そりなんだ。ところで旦那、博打は打つの？」

「んん？ 方々の宿場を巡りながら、その土地の賭場には必ず顔をだすよ

「すこいやあ！ 旦那はさすらいの博打うしつてわけだね！」

「まあ、房州の銀三つていやあちつとは知られた名だな」

「格好いい！ おいらもこつか旦那みたいな博打うちになりたいよ！」

「ハハ。この道は甘くないぞ」

そのうち二人は旅籠に到着した。

「ご苦労さん。ほら駄賃だ。四文ぐらいでいいか？」

「ありがとう！ 宿場を出る時も声かけてね。宿場口まで荷物持つよ。あつちの方は足場が悪くて歩きづらいんだ

「おう。それじゃあまたな」

「あ、ちょっと待つて旦那」

「ん？ どうしたい

「俺も博打うちになりたいから、この四文を賭けて勝負しておくれ

よ

「なに？ 負けたらただ働きになつちまつだ。それでもいいのか？」
「そりや、四文をすつてしまつのは恐ろしいけど、粋な博打ひこなるには腹をくへりないとね」

「言つじやないか。で、どうやって賭けるんだい？ 俺は賽も壺も持つけやしないよ？」

「じゃあ、これで賭けるのはどう？」

そう言つと小僧は自分の足元を指差した。

「その木の枝みたいな脚がどうしたってんだい？」

「違うよ。この草履で賭けるんだよ」

「はは～ん。草履を飛ばして表か裏に張るつて寸法かい。よつしゃ！」

「その勝負受けようじやないか」

「やつた！ それじやおいらが先に張つてもいい？」

「おう。なけなしの四文を賭けるんだ。それくらることは譲らないとな

「う～ん……。じゃ、おいら裏に張るよ」

「やうか、なら俺は表だな」

「じゃ、草履飛ばすよ」

「おうよ。勝負だ！」

小僧は空高く自分が履いていた草履を飛ばした。ゆつくりと弧を描いて落ちた草履は、裏を見せて止まつた。

「やつた裏だ！ 当たつた、当たつた！」

「あいたた。強いな小僧。末恐ろしい子供だなまつたく。ほれ、お

前の勝ち分の四文だ」

「すごいやあ！ やつきまで文無しだつたけど、これでハ文になつたあ！」

「おうよ、それが博打つてもんだ。今日は勝つたから倍になつたが、次の勝負は誰にもわからねえ。肝に銘じときな

「うん！ 旦那はいい人なんだね。勝たせてくれた上に博打のイロハまで教えてくれて」

「なんだいそりや。皮肉か？ ハハ、まあいや。またな小僧」

「うん。じゃあね、旦那！」

そうして男は旅籠に入つた。

「じゃまするよ」

「いらっしゃいまし。お疲れでしょう。わたくし、足元をお流し下さー

「すまないね」

男は荷物を降ろして、足を洗い始めた。

「お客さま、これはまた大層なお荷物ですなあ。長旅でござりますか？」

「江戸への買出しついでに、地の物を求めて方々を廻つていてね。ずいぶんと品が貯まつたものだからそろそろ帰るところだ。こっちを周つて帰るのは初めてだがね」

「それはそれは、」苦労さまです」

「ところでご主人、ちょっと聞きたいことがあるんだが

「はい、何でござこましょう」

「あんまり大きな声では聞けないんだが、……」こりゃ辺じや賭場は開いてるのかい？」

「はい、特に何もない宿場でござりますからね。あまり大きくはありませんが、この先を少し行つたところにひつそりと開いておりますよ」

「そうかい。いや、博打に目が無くつてねえ。といつても下手の横好きなんだが。さつきもそちらの子供と一緒に勝負して四文持つていかれちました」

男の言葉を聞いて主人の顔つきが変つた。

「お客様、それはこりらで悪名高い”いかさま童子”に仕組まれたんですよ」

「いかさま童子？ なんだいそりや」

「旅の人を狙つて博打を持ちかけるんです。草履の表裏で賭けをしようと言つんですが……」

「そいつだ！ そいつに四文持つていかれたんだ」

「その草履には細工がしてあって、飛ばすと鼻緒が取れるようにな

つてるんです」

「何？ てことは……」

「はい。必ず裏が出るんです」

「あの餓鬼……。それで先に張りたいと言つたんだな」「我々としても迷惑しているのですが、神出鬼没といいますか、すばしつこいといいますか、なかなか捕らえることがかないませんで」「まあ、子供」ときにいよいよあしらわれたのは癪に障るが、せいぜい四文損しただけだ。駄賃の高い荷物持ちに捕まつたと思えば氣も晴れるというものか

翌日、機嫌良く旅籠の一階から降りてきた男は、主人に挨拶をすると、懐から財布を取り出して紐をほどいた。

「いやあ、ゆつくりさせてもらつたよ。旅の疲れもずいぶんと抜けたようだ」

「ありがとうございます。またお寄りの際には是非ともご利用くださいまし」

そこで主人は小声になると、ひそひそと男に尋ねた。

「どうりでお客様、賭場の具合はいかがでしたか？」

「具合も何も、実にいい賭場だねえ。いつものツキの無さが嘘みたいて当たる当たる。預けていた運がいつぺんに返ってきたみたいだよ」

そう言つと男はにんまりと笑い、手にしていた財布を主人に見せた。それは不恰好なまでに太く膨らんでいた。

「それはそれは。よつよついましたな。……しかしお客様、近頃はすりもよく出るといいます。懐が膨らんでいるとよからぬ輩を誘つやもしぬません」

「それもそうだな。では財布にはわずかに残すとして、金子は別に隠しておくとするか」

「それがよいかもせませんな」

勘定を済ませた男は旅籠を出ると、町の出口を手指して歩きはじめた。しばらく歩いて町並みも寂しくなった頃、男は柿の木の下にしゃがんでいる子供に気付いた。よく見てみるとそれは、昨日まんまと四文を騙し取ったあの荷物持ちの子供だった。むつと顔を曇らせ、昨日の勝負に文句を言おうとした男だったが、それも大人気ないとして、声を掛けぬまま通り過ぎようとした。しかし、子供の方も男に気付き、勢いよく走って近づいた。

「旦那、もう町を出るんだね。約束通り荷物を持つよ」

「うん？ ああ……」

「昨日も言つたけどこの先は道が悪くて、これまでも荷を担いだ旅の人気が何人も足を痛めてるんだ。慣れてるおいらに任せてくれば安心だよ」

「それはそうなのだろうな。しかし……」

歯切れの悪い男に何を感じ取ったのか、子供は意外なことを言い出した。

「今日は駄賃はいらないよ。博打で勝たせてもらったし、なにより旦那はいい人みたいだから」

子供の申し出に対しても男は警戒を解く事はなかったが、結局荷物を預けることとした。まだまだ続く道中を思うと少しでも樂をしたかったし、なによりタダだ。"いかさま童子"であることを除けば十にも満たない子供相手、何かあつたとしても捕まえてしまえばどうとでもなる。

ほどなくして二人は子供の言つ足場の悪い道へと入った。

「なるほど、これはひどい道だ。重い荷物を持つたままでは確かに危なかった」

「だろう？ ここで怪我して、また宿場に引き返す人も多いんだよ

「そりだらうそりだらう。いや、良い荷物持ちに出会えたもんだ」

掛け合なしにそりだらうと、男は子供の案内で一步一步確かめるように歩き、ようやく平らな道に出ることができた。そこはもう町の外で、いつの間にか通り過ぎたのか、はるか後方には町の名を彫つ

た道標が見えた。

「ふう、ようやく落ち着けるな。いや本当に助かった。礼を言ひよ」
「礼なんていいよ。でも、一つお願いがあるんだ」

「お願い？ なんだい？」

「もう一度、勝負を受けてくれないかな」

「勝負？」

またしても子供はいかさま勝負を持ちかけてきた。やつを今までの感謝が一度に失せてしまった男は、いよいよそのいかさまを齧めようとしたが、すんでのどこりで思ことどまつた。いかさまをただ指摘しても面白くない、じつせやるなりば、わづらじと懲らしめてやる、と思ったのだ。

「いいだろう。で、また草履の表裏で勝負するか？」

「うん。また四文の勝負でいいよね」

「ああ構わんよ。先に張るか？」

「いいの？ それじゃあ、駿を担いでまた裏に張るよ」

「よし。俺は表だな」

そこまで話して、子供が草履を飛ばそうと足を後ろに振ったとき、男は待つたをかけた。

「言つのが後れたが、勝負を受けるにあたつて、一つ条件がある」「条件？」

「草履は俺が飛ばす。その条件を飲めぬなら勝負は無しだ。どの草履にも表裏はあるのだからな」

男はそう言つとんにやりと笑つた。対して、子供は急に落ち着きがなくなり、着物の裾をつかんでうろたえた。どっちが出るかわからぬ真剣勝負に、なけなしの金子を賭けるなどはできまい、そう思つて男はほくそ笑んだ。いい気になつた男は、もう少しお灸をすべてやううかと考えをめぐらせたが、それを思いつく前に子供が切り出した。

「わかつたよ。旦那がそう言つなら仕方ないや。旦那の草履で勝負

しよう

「え？ ん？ 本当にいいのかい？」

「うん。昨日はおいらが勝つたし、今日は旦那の条件を飲むよ」
予定では、泣いて許しを乞う子供に、説教の一つでもして、世の中の厳しさを教えてやろうと思っていたのだが、まさか勝負を受けると思っていた男は、逆にうろたえることとなつた。それでもなんとか取り繕うと、引き下がるわけにはいかずに勝負に入った。

「いいんだな？ それじゃ、草履を飛ばすぞ」

「うん！」

子供は悲痛な顔つきで頷くと、勝利を願い手を合わせて拝んだ。
五分の勝負に違いはないと、男は勢いよく右足の草履を蹴り上げた。
高く上がった草履はぼとりと落ちて、裏を見せたまま止まつた。

「やつた！？ また勝つた！？」

子供は飛び上がって喜んだ。一方の男は、いかさまなしでも負けてしまつたことが信じられず、大人気なく地団駄を踏んだ。子供のいかさまを懲らしめるために受けた勝負だったはずが、結局負けてしまつてはその意味がなかつた。なにより、昨晩の賭場では玄人相手に負け知らずだったのに、小さな子供には一度も勝てぬまま町を去る自分がどうしても許せなかつた。男は人差し指を立てながら子供に迫つた。

「まだだ！ まだ終つてない」

「え？ 旦那、どうしたの？」

「まだ草履は残つてゐる！ これで最後の勝負といこうじゃないか！」

そう言つと、男は自分の左足を指差した。しばらく呆気に取られていた子供だったが、すぐに無邪気に笑うと、嬉しそうに頷いた。

「それじゃあ、最後に十文の勝負といこうよ

「いいのか？ それは願つてもない話だ。そつそつ何度も負けんぞ

！」

「最後の勝負だ。旦那、思いつき飛ばしておくれよ！」

「おおともよ！ 派手にいくぞ！」

十文の勝負ならば、子供に取られた分を取り戻してお釣りがくる。半ば興奮気味の男は、最後の希望を乗せて左足の草履を思いつきり蹴飛ばした。空に向つて勢いよく上がる草履を睨みながら男は叫んだ。

「どつちに張る…？」

「おいらは裏！」

「俺はもちろん表だ…！」

さつきよりもさらに高く空へと舞つた草履は、風に流されてずいぶんと離れた所に落ちた。その草履を見るために、裸足で駆けていた男は、表を見せている草履を確認した。

「やつた…、表だ…、勝つた、勝つたぞ…！」

男は大げさなほどに喜んだ。何度も草履を指差して、狂つたように笑つた。いたずらな子供を懲らしめるという目的を完全に忘れて、念願の勝利をこれでもかと噛み締めた。

「ほり見ろ！ 表だ！ 間違いなく表が出たぞ…！」

そう言つて振り向くと、子供に對して勝ち誇りうつとした男だったが、さつきまでそこにいたはずの子供の姿がどこにもないことに気付いた。笑顔を貼り付けたまま、子供の姿を探すが全く見当たらぬ。何事が起こったのかわからぬまま子供を捜し続けた男は、遠くの方から呼ばれていることに気付いた。その方向を見ると、町の道標近くで手を振る子供の姿が見えた。その背には男の大きな荷物が担がれ、金子を隠していた手荷物も携えていた。

「おおい、田那あ！ 博打は最後まで氣を抜いたらやいけねえよ。じやあなあ

子供はまた大きく手を振ると、あつという間にあの険しい道を引き返していった。

「お、おい！ 待て！ い、痛、痛た…！」

草履を拾うこともせずに後を追おうとした男は、とがった石を踏みつてしまい、立ち止まるよりしようがなかつた。目の前にはさ

らに多くの小石や、刈つたばかりの笹などが続き、とても裸足では進めない。その場で滑稽にじたばたしていた男だつたが、子供の姿が全く見えなくなつたことを知つて、呆然とその場に立ち尽くした。「勝負を持ちかけたのも、俺の条件を飲んだのも、全て計算ずくだつてのか。はなから俺の荷を狙つて……」

いかさま童子にしてらやれたと氣付いた男は、へなへなと地べたにしゃがみこむと、しばらくその場を動く事ができなかつた。その背後では、ほつておかれたままの草履が、いつまでも主を待ち続けた。

(後書き)

テーマは「敗北」です。ギャンブルは人を狂わせます。勝つても負けても、人生にはマイナスに作用すると思ってます。だけど、ギャンブルに関わる人というのは魅力的であります。そんなギャンブル狂の負けっぷりを描いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4571f/>

丁半草履

2011年7月26日13時51分発行